



グローバル・ヘルスにおける“ボケ”と“ツッコミ” ～現場は“お笑い”の宝庫？～

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

人材開発部 研修課 松岡 貞利

「めっちゃ、うける!」、「めっちゃ、かわいい!」、「めっちゃ、やばい!」といった言葉が、子供や若者を中心に、しかし中年の人々も含めて幅広い層から発せられている昨今です。関西ではもちろんですが、関東でも東北でも九州でもこの言葉をよく耳にします。私はこの言葉を使わない中年のひとりです。使わない理由をあえて挙げれば、この言葉で自分の気持ちが本当に表現されているとは思えないからだだと思います。自分にとっては「すっごく」のほうがしっくりきます。ちなみに私の出身地の宮崎県では「てげ」と表現します。強調するときは「てげ〜」や「てっげ」となり、「すっごくかわいい娘を見たんだよ!」を宮崎弁に変換すると「てっげかわいい娘見たっちゃが!」となります。「ちゃ」・「ちゅ」・「ちょ」が多用されるのも宮崎弁の特徴です。序章からいきなり脱線した感がありますので話を戻したいと思います。ここで言いたいことは、“お笑い”が我々の日常生活に非常に身近なことです。テレビをつければ、多くのお笑い芸人がひな壇に座り、“ボケ”と“ツッコミ”の応酬で会場を沸かせている番組をよく目にするのではないでしょうか。その影響でしょうか、この“ボケ”と“ツッコミ”というお笑いの方程式は一般の人々のあいだでもずい分と定着しているように感じます。

海外で、特に開発途上国で仕事、生活をしていると日本ではあまり起こらないような珍事件に遭遇し、微笑ましい気持ちになったり、思わず吹き出してしまったりすることがよく起こります。そこにお笑い芸人がいたらほぼ間違いなく「なんでやねん!」とツッコミを入れるのではないのでしょうか。また、笑いそうになるけど内容が深刻すぎて「笑えないだろ!」とツッコミを入れたい場面にも身を置くこ

ともあります。本稿では、筆者が経験してきたそんな経験のいくつかを紹介したいと思います。読者の皆さんもぜひツッコミを入れてください。お笑い芸人を目指す人は沢山いるようです。芸人養成学校に行くのも一つでしょうが、開発途上国で生活するのもよい勉強になるのではないかと本気で思っています。

約10年前のことです。カンボジアの農村部で妊産婦死亡の原因を探ろうと調査を行いました。まずは妊産婦死亡例があるかどうかを確認するため高床式の家々を訪ね回りました。当時のカンボジアの妊産婦死亡率は472 / 10万出生と高い状況でしたが、分母が10万出生ということからも分かるように、そんなに簡単に見つけることは出来ません。村長さんの家から調査を始めました。調査の主旨を説明し、前半は村の一般概況についての話を伺い、いざ質問です。「ここ最近で、妊娠したり赤ちゃんを産んだりして亡くなったお母さんはいますか?」。すると村長さんは床に目を落としながら静かに答えました。「いるよ・・・」。と。1軒目で見つけ出すことができたことへの興奮を抑えながら、次の質問を投げかけようとすると「下に見えるでしょ。」と相変わらずもの静かに語る村長さん。「え、何が?」。「ほら子ブタたちが見えるでしょ。」と村長さん。確かに高床式の家の床のすき間を通して子ブタたちが見えます。「あの子ブタたちね、昨日産まれたんだけど、母ブタはそのあとに亡くなってね・・・。」と、とても真面目な顔で説明する村長さんでした。妊産婦ならぬ妊産豚(にんさんとん)死亡の存在を初めて知った瞬間でもありました。



妊産豚死亡が発生した村の様子。
典型的なカンボジア農村部の風景。

次は5、6年前の西アフリカ ナイジェリアでの話です。当時の私の上司が自分の雇用する運転手さんにお使いを頼みました。口頭でのお願いだけでなく、わざわざ「Orange×8 (オレンジ8個)」と書いた紙も渡してお使いです。戻ってきて玄関をノックする運転手さん。ドアを開けると「マダム、買ってきました。どうぞ!」と通る声で言いながら、自信満々に黒のビニール袋を差出したそうです。中を見るとオレンジではなくナス!が入っており、「え?なんでナス買ってきてんの?オレンジって言ったじゃん!紙にも書いて渡したでしょ!」と、当然のことながら責められます。窮地に追い込まれた運転手さん、最後に言い放った言葉は、「でも8個です!」だったそうです。すごい言い訳ですよ。少し苦しいですが、あえてこの運転手さんの肩を持つならば、「orange (オレンジ)」と、主に英国で使われている「aubergine (オーバジーン:ナス)」の発音が似ていることでしょうか。

「でも8個です!」で最後まで強気を見せた運転手さんですが、ナイジェリア人らしさを現しているように感じます。サッカーの国際試合の解説などでナイジェリア・チームは「アグレッシブ (攻撃的)」だと聞かれた方もいるのではないのでしょうか。この攻めの姿勢については、アジアではインドやパキスタン、中国などが共通しているように思います。アクセントの強い英語で畳みかけるように主張してこられると、筆者は30代前半くらいまでは相手のペースに飲まれていました。歳を重ねるにつれて上手く

対応できるようになってきたと思います。畳みかけるように「多く」のことを語る人は、余計なことを喋ってしまうこともあるようです。つまり理論の一貫性を壊し得る“ボケ”を放ってしまうのです。冷静に聞いていると、この“ボケ”のいくつかに気づきます。その“ボケ”の一つ一つに丁寧に“ツッコミ”を入れると相手の姿勢も軟化してくることがあります。この例は“ツッコミ”的な攻めの姿勢で話を展開し、自分に有利に進めようとしたのに、喋りすぎが“ボケ”を生み、最終的に相手の“ツッコミ”によって期待通りの成果を得られなかった自滅型といえるでしょう。

またカンボジアに戻りましょう。思わず笑いそうになったけど、背景にある事実が重すぎて笑えなかった例です。ある州の保健局の月例会議に出席していたときのことでした。当時デング熱のアウトブレイクが起こっており、関係者は予防に治療に追われていました。この州内にある1地区(人口約10万人)だけ見ても、ピーク時には一ヶ月だけで6,000症例を越えたほどです。予防策として、感染源の蚊の生息地を減らしたり、ボウフラを殺虫したりしていました。なかなか症例数が減らない中で、50代と思われるある行政地区の男性担当者が真剣な顔で語り始めました。語り始めて5、6分経った頃のことでしょうか、「どうして殺せないんだ!どうして我々は蚊を殺せないんだ!!クメール・ルージュ時代にはあれだけの人々を殺したというのに!!!」。私の耳元で通訳をしてくれた現地スタッフに思わず、「君は何を言っているんだ!」と少々叱り口調で言ってしまいましたが、すぐに「言ったのは僕じゃありません。」と逆ツッコミを受けてしまいました。クメール・ルージュとはポル・ポトが1975～79年に率いた共産主義政党の名前で、この時代に人口の1/3にあたる170万人の大虐殺があったとされています。笑えません。

最後は微笑ましい気持ちになった出来事で締めたいとおもいます。上記に述べた国々で、いちばん微笑ましい状況に出会えるのはどの国でしょう。私はカンボジアではないかと思っています。カンボジアで産婦人科系のトップ病院である国立母子保健センターで週毎の幹部会議に出ていた時のことです。この病院は当時、年間7,000分娩、700の帝王切開を取り扱う大病院です。強面の院長先生を中心に事務系、

臨床系の各部門長が集います。院長先生は大変優秀な方で、会議中には鋭い指摘や指示が飛びます。そんなある一定の緊張感がある中での事務系のある部門長からの報告です。「〇月△日。XY病棟の入院室内でネコがいたとの報告を受けたので、捕まえて逃がしました。」。会場を見渡すと、強面の院長先生をはじめ、全幹部職員が「なるほど」と納得した感じの真剣な顔でその報告を聞いているのです。繰り返しになりますが、大病院の幹部が真面目な顔でネコを捕まえた話をしているのです。このほのぼのとした様子が私には何だかとても可愛らしく感じられ、微笑ましい気持ちになりました。

最後になりますが、グローバル・ヘルスにおける“お笑い（笑えないものも含む）” 5 事例を紹介いたしました。多くの事例に共通しているのは、“ボケ”た本人はボケているなど微塵も思っていないことです。皆さんすこぶる真剣です。真剣さが生んだ成果



カンボジアの母子保健行政官による会議の様子。
笑いの種／ネタは、真剣な会議中に突然やって来る。

物は“ボケ”であれ何であれ他人を魅了するという
ことでしょうか。こんなお笑いの宝庫、グローバル
・ヘルスを引き続き楽しんでいきたいと思ひます。

